

【日本社会学史学会・2019年度秋の関西研究例会】

2019年10月26日(土) @京都大学文学部 第二報告

「デュルケム、ゴフマン、ガーフィンケル——学史の“バミューダトライアングル”を探訪(い)く (遭難しないのか?)」

1. なんてたってデュルケム——私の社会学そもそも

- ・ イリノイ大学(シカゴ・サークルキャンパス)行動科学科の院での留学時代(70s半ば)学生ビザキープのために、学部レベルの講義、「社会学の古典理論(ヨーロッパ編)」・「同(米国編)」を取り、社会学の古典(コント、スペンサー、ウェーバー、デュルケム、ジンメル、パレート…)を英語で読んだ
「分業論」「方法的基準」「原初形態」を2週か3週で…→拾い読みながら、「原初形態」の儀礼論とカテゴリーの社会的起源についての議論が、とにかく面白かった！
さっそく、ハーシの絆理論(←彼は当初はデュルケミアンだった)を下敷きに、宗教の非行統制の経路について、ウェーバー(「プロ倫」とデュルケム(儀礼論)のどちらがより説明力が高いかという計量研究(イリノイ州の青少年調査のデータを使った)をでっちあげ、MAをもらった¹
- ・ 帰ってきてからは、準拠集団論をワンクッションにしてマートンのほうの「アノミー論」に移ったが、いろいろあって構築主義の宣伝屋に；しかし、そのアプローチの出発点のラベリング論は、逸脱の反作用的定義および集合表象論(⇔ラベリングに使われるラベルの社会的起源)という二点においてデュルケミアンだった

2. デュルケム(1858-1917)、ゴフマン(1922-1982)、ガーフィンケル(1917-2011)

- ・ コリンズの整理@*Four Sociological Traditions*²: ①コンフリクト理論(マルクス、ウェーバー、ダーレンドルフ、ジンメル、コーザー、フランクフルト学派、世界システム論、コリンズなど)、②功利主義理論(アダム・スミス、ベンサム、ゲーム理論、ホマンズ、ブラウ、コールマンなど)、③デュルケミアン理論(コント、スペンサー、デュルケム、モース、パーソンズ、マートン、ラドクリフ=ブラウン、ウォーナー、ゴフマン、ダグラス、バーンステイン、レヴィ=ストロース、ブルデューなど)、④マイクロ相互作用論(プラグマティズ

¹ “Religion and Delinquency: Research on Religion's Social Control Over Deviant Behavior,” Practicum paper submitted to Sociology Department, University of Illinois at Chicago Circle, 1977.

² 邦訳『ランドル・コリンズが語る社会学の歴史』(友枝敏雄他訳、有斐閣 1994=1997)。

ム、キーリー、トマス、ミード、ヒューズ、ブルーマー、ラベリング理論、シュッツ、サルトル、ガーフィンケル、ゴフマンのフレーム分析など)

もちろんものすごい荒技=系譜の整理として、わりと上手くいっているのは②と③だろう：とくに、デュルケムの遺産が、米の社会学の機能主義と、仏の文化人類学（構造主義）& 英の社会人類学の二系統に分岐して継承され展開したと指摘、後者（のうちのさらに後者）の流れの中にゴフマンを位置づけた“デュルケミアンゴフマン”説は、当時（とりわけまだ「三つの社会的伝統」だった1980年代）には、慧眼であり、影響力大だった（→大村英昭のデュルケム+ゴフマンを使った議論のネタ元でもある）³

★デュルケム、ゴフマン、ガーフィンケルの「ユダヤ人問題」⁴ は、たぶん三人三様だった（というか、マルクス、ジンメル、フランクフルト学派、シュッツなどと合わせて、各人各様だった）

・ デュルケムとゴフマン：

ゴフマン像の変遷：“ミーディアン(シンボリック相互論者)ゴフマン” → “デュルケミアンゴフマン” → “ジンメリアンゴフマン” (←いまここ)⁵

ゴフマンは sui generis： とはいえ、デュルケム～ラドクリフ＝ブラウン～ウォーナー～ゴフマンと具体的にたどりうるつながりが、初期ゴフマンの儀礼論＝相互行為場面におけるミクロ機能主義として結実していることは疑えない

「中河くん、デュルケムの社会はたくさんの表象で成り立っているけど、表象はいわば宙に浮いていて、そこには相互作用がないんですよ」（うろおぼえだけど、故中久郎先生が、

³ ちなみに、①の「コンフリクト理論」の系譜化も、コリンズ自体の所説(Randall Collins, *Conflict Sociology: Toward an Explanatory Science*, Academic Press, 1975) に引き寄せた我田引水という印象を受けるが、じつは、④の「ミクロ相互作用理論」にもじつは大きな無理がある。いわゆるシンボリック作用論とシュッツの現象学的社会学、そしてエスノメソドロジーはそれぞれ前提を大きく異にしており、それらがある程度知っている者にとっては、木に竹を接いだ以上の不整合を感じざるを得ない。

⁴ ゴフマンについては、薄井明「若きゴフマンの知的生活誌—高等学校時代と大学時代—」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』(24), 37-50, 2017 参照。

⁵ 薄井明の「ゴフマンの『隠れジンメリアン』疑惑：従来のゴフマン理解の見直し」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』(20), 7-20, 2013 や、「ジンメルの影響圏におけるゴフマン社会学」同上(22), 19-29, 2015。なお、よりオーソドックスなジンメルとの関係についての理解を示すものに、Murray S. Davis, "Georg Simmel and Erving Goffman: Legitimizers of the Sociological Investigation of Human Experience," *Qualitative Sociology*, vol.20: 369-388, 1997 がある。

このような趣旨のことを二人だけのときの会話でおっしゃったと記憶する)

いや、先生、(1)「方法の基準」における犯罪の反作用的定義の所説や、「原初形態」における儀礼論があるじゃないですか！（日常的な相互作用についての議論はなかったかもしれないけど）、(2)でもって、デュルケムの表象論&儀礼論に相互作用を強力に注入したゴフマンがいるじゃないですか！

- ・ デュルケムとガーフィンケル：

ヒルバートとロールズ

- ・ ゴフマンとガーフィンケル（トライアングルのいちばん遭難しそうな辺）：

サックスとシェグロフのゴフマン門下からガーフィンケル門下への移籍

「アグネス論文」における passing をめぐるガーフィンケルのゴフマン批判⁶

ゴフマンのマンチェスターでの講義の際のガーフィンケルとサックスのレコメンデーション→シャロックら英国 EM 派の誕生

ゴフマン門下のスコットのサックス詣で、サドナウ、アンダーソン（英）らのゴフマンから EM への移行

『*Frame Analysis*』の序章でのゴフマンのガーフィンケルへのコメント

『*Forms of Talk*』でのゴフマンの所説とシェグロフらの反論=会話分析 vs.ゴフマン

3. トライアングル航行の水先案内人、アン・ロールズ

○次回社会学理論学会大会の自由報告のタイトル案：

⁶ これについては、鶴田によるゴフマンとガーフィンケルを総合する（もしくは使い分ける）試みあり→

ガーフィンケルの介添え役（ナニー）？—アン・ウィットフィールド・ロールズとデュルケミアントラディション

【日本社会学史学会・2019年度秋の関西研究例会】

●日時：2019年10月26日（土） 14時00分～17時30分

●場所：京都大学本部構内 総合研究2号館1階 文学部第10演習室
(<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/access/>)

●報告者：

1. 崔昌幸（京都大学大学院）

「システム／生活世界概念の導入の意義——J.ハーバーマスによる運動論にもとづいて」

2. 中河伸俊（関西大学）

「デュルケム、ゴフマン、ガーフィンケル——学史の“バミューダトライアングル”を探訪(いく)く(遭難しないのか?)」